

2017年11月5日カンタベリー長老教会主日礼拝メッセージ 柏倉秀吉師

聖書：ヨハネの福音書3章1-8節

タイトル：聖霊の風によって生きる

---

皆様こんにちは。

いつも私たち家族と、日本語部のためにお祈りいただき誠にありがとうございます。

今回初めて、合同礼拝でメッセージする機会が与えられ、感謝しております。

私達家族はメルボルンに来て3年目となり、生活もスムーズになってきました。お祈りしていただいております妻の腰の痛みもだいぶ良くなり、子供達も全員元気に過ごしております。皆様のお祈りを本当に感謝致します。

また日本語部については、今年で設立26年になると、ピーター長老から聞きました。

これまでの長い間、日本語部のために、ご支援とお祈りをいただき、心から感謝致します。

<祈り>

今からちょうど20年前になりますが、私は農業大学を卒業後、アメリカのカリフォルニア州へ約1年間農業研修に行き、酪農と葡萄栽培を学びました。

農場で一緒に働いていた人々は、メキシコ人やブラジル人、またスイス人やポルトガル人などで、みんな陽気で楽しい人たちでした。しかし、中には仕事に対していい加減な人たちも多くいました。彼らは来たり来なかったり、あるいは来たとしても、勝手に早く来て、途中でやめて勝手に早く帰っていくことが度々ありました。

また農場の研修所でルームシェアをしていた同僚は、朝からお酒を飲んで、酔っぱらった状態で出勤することもあり、仕事にならないことがありました。その他にも目に余る行動がたくさんあり、ある時私は我慢できなくなり、彼を蹴飛ばしたこともありました。

耐えられないと思った私は、農場のボスに相談しました。

すると、ボスは私に、「人を片側から見て、その人を悪い人だと決めつけるのは良くない。彼らにも良いところがあるのだから。」と、教えてくれました。

ボスのその言葉を聞くまで私は、『自分は農場で真面目に仕事をしているし、非難されるところがない正しい人間だ。』と信じていました。

しかしそれは、日本人的な考えによる自己評価であり、『自分の中だけの正しさでしかない。』ということに気付かされました。

その時、私の心の中にある、人に対する怒りや、偏見が明らかになり、これこそが、どす黒い「罪」である。ということが分かりました。

私はこの出来事を通して、日本人やメキシコ人やブラジル人、またスイス人やポルトガル人やアメリカ人・・・にとっての正しさではなく、さらには『自分だけの正しさ』でもない、「普遍的な正しさ」とはいったい何なのか？と、「真理」を追い求めていくようになりました。

農業研修が終わる時、ボスは、私に日本語の聖書をくれました。彼はクリスチャンでした。

私はこの時、生まれて初めて聖書を読み、そして聖書から真理を探すようになり、神様のことを真剣に考えるようにもなりました。

その後、まもなく帰国するという時に、友人が突然の事故に遭いました。友人もまたクリスチャンでした。

このことをきっかけに、私は彼に付き添って、彼がお世話になっていた日本人教会へ行かなければならなくなりました。真理に飢え渴いていた私は、これまで疑問に思っていた様々な事を、牧師に聞くことが出来ました。そして聖書を通して、聖書が記している創造主こそがまことの神である！ということ、またイエス様が、私の罪の

ために十字架にかかってくださった！ということ等を深く理解することができました。そして求めていた本当の真理を知ることが出来ました。すると、まわりのものすべてが輝いて見えました。私は洗礼を受けて日本へ帰国しました。

日本へ帰国後、クリスチャンとなった私は、救いの喜びに満たされて、教会生活が始まりました。教会の方々皆、優しく、天使のようだと思いました。

けれども、教会生活が進むにつれ、はじめは天使のようだと思っていた教会の方々に対して、不信感を抱くことも出てきました。また教会内である人たちが争っている姿を目にすることもありました。そうしていつの間にか、周りの人々を裁いて、批判し、悪い心で人を見ている、以前と変わらない自分が居ることに気付きました。

真理を知り、罪を悔い改めて、クリスチャンとなったはずなのに、依然として悪い心を持つ自分が居る。そうした罪の性質が取り去られないでいる。本当に憂鬱になりました。

しかし聖書を読んでいくと、あの十二弟子たちの中にも、同じような課題があったことを知らされます。十二弟子たちは、イエス様の側で数々の奇跡を目の当たりにしてきました。そして誰よりも近くで、神の教えを直接聞いていました。それなのに、イエス様が十字架にかけられる直前でさえ、彼らの話題の中心は「誰が一番偉いのか！」ということでした。彼らはイエス様の弟子として、互いに助け合い、一致していくのではなく、それぞれが自己主張を通し、互いに権力を求めたのです。

そんな彼らでしたが、イエス様の復活の後、聖霊が与えられてから、驚くほど変えられました。権力を求めるのではなく、迫害も死も恐れずに、行うべき福音の使命を果たすため、神の声を聞きながら、互いに一致協力していくようになりました。

つまり、十二弟子たちは聖霊によって全く変えられていったのです。これは、私達も同じです。聖霊によらなければ、古い肉の自分が、依然として顔をのぞかせるのです。そして自分のことだけを主張したり、争ったり、批判したり、悪い思いが言葉となって口から出てきます。また教会内で変化を擁する時は、さらに問題が表面化することがあります。例えば、会堂建築、またその他の修繕、整備、そして食事のこと、さらには牧師招聘のことなどは、意見が大きく分かれる場合があり、不必要な争いになることがあります。

私達は徹底的に、聖霊によらなければ、自分の力で、古い肉の自分に打ち勝つことは出来ないのです。

さて、本日の聖書箇所である、ヨハネの福音書3章1－8節には、イエス様とニコデモの対話が記されています。

3節でイエス様は、「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」と仰いました。また5節で、イエス様は、「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、水と御霊(聖霊)によって生まれなければ、神の国に入ることが出来ません。」とも仰いました。

つまりイエス様は、「人が「新しく生まれる」ということは、それは「水と御霊(聖霊)によって」生まれるのだ。」と仰ったのです。この「水」についての解釈は、諸説あるようですが、おそらくは、「聖めの水」のことで、それは「罪を聖める」ことを意味していると思います。そして「御霊」とは、「聖霊」のことです。

またイエス様が言われた「生まれなければ」という言葉は、ギリシャ語の聖書を見ますと「生まれさせられなければ」という受動態の言葉のようです。ですから、これらのことをまとめますと、「罪が聖められ、聖霊

によって新しく生まれさせられなければ、聖い神の国を見ることも、また入ることも出来ない。」ということになります。

ニコデモという人は、1節を見ますと、「パリサイ人」であったことが分かります。「パリサイ人」とは、ユダヤ教の律法に対して最も厳格な立場の人のことです。また彼は「ユダ人の指導者であった。」とも記されています。NIVの聖書では、「a member of the Jewish ruling council」と記されています。つまり、ニコデモは、ユダヤ人の最高議会の議員の一人であった。ということです。

彼は、律法については厳格で、また良く熟知し、人々に先生と呼ばれ、教える立場の者でした。その彼が、2節を見ますと、「夜、イエスのもとに来た。」と記されています。ヨハネの福音書の中で「夜」という言葉は、否定的な意味で使われていることがあるようです。とすると、このニコデモは、「昼、人目に付く時間滞ではなく、夜、人目に付かない時に、イエスのところに来た。」ということなのかもしれません。

この時ニコデモは、「先生。私たちは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神がともにおられるのでなければ、あなたがなされるこのようなしるしは、だれも行うことができません。」とイエスに言いました。

ニコデモは、自分がパリサイ人として律法を厳格に守り、またユダヤ人の指導者として律法を熟知していても、そこには何か満たされない、神との交わりにおける限界があることを、知っていたのかもしれませんが、それゆえ、「神がともにおられるのでなければ、あなたがなされるこのようなしるしは、だれも行うことができません」と、言ったのではないでだろうかと思うのです。

つまり彼は、『私は律法を知っている者ですが、一体どうしたらあなたのように神と共にいるようなしるしを行えるのか、私にはそのことが分からないのです。』と、神との豊かな交わりに飢え渴いていた思いが、ニコデモの言葉の中には含まれていたのではないかと思います。

イエス様は、そのニコデモの言葉に対して、「人は、水と御霊によって生まれなければならない」のだ。と言われました。

しかし、ニコデモには、「水と御霊によって生まれる」ということが、いったいどのようなことなのか、全く分からなかったのです。そのニコデモに対して、イエス様は、「あなたがたは新しく生まれなければならない、とわたしが言ったことを不思議に思ってはなりません。風はその思いのままに吹き、あなたはその音を聞くが、それがどこから来てどこへ行くかを知らない。御霊によって生まれる者もみな、そのとおりです。」(7-8節)と、言われました。

イエス様は、「新しく生まれなければならない」ことを、「不思議に思ってはなりません。」と、言われました。そしてそれはまるで「風」のようなものだと、言われました。

この「風」という言葉は、「御霊」という言葉と同じ言葉です。すなわち「聖霊」です。ですから、この「風」とは「聖霊」のことです。イエス様は、この「聖霊の風」について、少なくとも5つのことを教えてくださいます。

①「聖霊の風」は、「思いのまま」である。

「思いのまま」というのは、誰によっても制限されず、自由と主権を持っているということです。それは、どんなに困難で厳しい状況であろうが、聖霊の風は主権を持って、自由に思いのまま行うことが出来る。ということです。クリスチャンを迫害していたパウロに、聖霊の風は思いのまま吹き、パウロはクリスチャンとされました。私達は聖霊に対して、勝手に制限をつけてはなりません。

②「聖霊の風」は、休まず「吹いている。」

「吹いている」というのは、目には見えませんが、「感じる」ことが出来るものです。そしてその「強さ」を私達は感じる事が出来ます。言い換えれば、「聖霊は休まずに働き続けてくださっている。」ということです。私達は、そのことを今日、どれぐらいの強さで感じているのでしょうか？また、この教会に、そして一人一人に聖霊の風が休まず吹いていることを感じているのでしょうか？

③「聖霊の風」は、「音が聞こえる。」

教会の中に、変化がもたらされて行く時に、今まで聞いたことが無いような「音（人々の行動や証）」が聞こえてきます。その時に、聞いたことがないからと、「音」を消そうとすることよりも、その「音」をよく聞かなければなりません。私たちはどれほど、聖霊が奏でる「音」を聞いているのでしょうか。

④「聖霊の風」は、「どこから来るのか分からない。」

世界宣教が、エルサレムから始まり、ユダヤ、サマリヤの全土及び地の果てにまで広がって行きました。しかしそれがどのようにして、今の自分たちのところに来たのか、分かりません。今からちょうど500年前の10月31日に、マルチン・ルターがヴィッテンベルクの教会の扉に「95か条の論題」を貼り付けました。このこともまた、聖霊はどこからか来て、神の御業を成してくださったのです。教会に導かれてくる新来者も、どこから来るのか分からないことが多いです。私達は、どこから来るか分からない、聖霊が送ってくださるそうした風に対して、受け止めるだけの十分な備えをしなければなりません。せっかく新来者が送られて来たのに、それを迎え入れる私達側に、準備が出来ていないということはないのでしょうか？

⑤「聖霊の風」は、「どこへ行くかを知らない。」

人間的な計画や計算は、あまり当てになりません。はじめからゴールありきで、物事進めて行く時に、聖霊が行こうとすることを止めることがあります。私達は、聖霊が導くままに委ねることが必要です。そして委ねるためには、「聖霊の風」を感じていなければ出来ないことです。

ニコデモは、ユダヤの律法をどのように守ったら良いのか、そのやり方は熟知していました。しかし、それだけでは限界があったのです。本当に大切なことは、生きた神との交わりです。すなわちそれが、聖霊によって日々新たに生まれさせられていくという信仰の歩みです。

律法主義的に、「どのようにすればよいのか？」と、「自分の行い」に目を向けていたニコデモには、この「聖霊の風」が分からなかったのです。

聖霊は風のごとく、思いのままに吹き、音を立て、どこからか来て、そして新たな所へと私達を導いてくださいます。私達は、その聖霊の働きを感じつつ、目を留め、心に留めながら、そして日々新しく生まれさせられながら、神の国を見る者とさせていただきたいと思えます。

そうでなければ、古い肉の自分がまた顔を出したり、ニコデモのように、決まった形式のなかで、どのようにしたらよいのか？と、迷うことが出てくるのではないのでしょうか。

神様が、このカンタベリー長老教会に、これからいったいどんなに素晴らしい御計画を与えてくださっているのかを、心から楽しみにしています。主の祝福が皆様の上にありますように!!

アーメン。